

5歳児におけるアイススケート指導回数と習熟度について

岡崎 康江

社会福祉法人多摩育児会多摩保育園

はじめに

当園では過去11年間(1987年～1997年)にわたり、5歳児にアイススケート指導を行ってきた。

年6回から始まった指導だが、年8回と増し、昨年からは年12回行っている。

その指導回数と習熟度について考察をしていきたい。

方法として

回数が増えた近年の95年6回、96年8回、97年12回の3か年の、指導回数と習熟度を観察調査した。調査は、指導回数による習熟度の違い、及びスケートを楽しむ事が出来るようになったかの二点を主とした。

保護者がスケート指導をどの様に受け止めていたのか、アンケート回答による報告も併記する。

①年度別指導回数と園児数

指導年度	回数	園児数
95年・10月～3月に実施	6回	28名
96年・3月・9～3月に実施	8回	30名
97年・2月～6月、9月～3月に実施	12回	32名

会場 昭島市昭和町 (株)昭島の森スケートリンク

指導 同上インストラクター2名

引率者 保育園職員3名

時間 30分間

②指導内容に於ける回数別習熟度

指導内容	習熟度(%)		
	6回	8回	12回
1回目 水に慣れる			
靴のはき方	25	25	25
陸上での転び方	50	50	50
陸上での歩行	90	90	90
氷上での転び方	50	50	50
2回目 氷上歩行			
靴のはき方	30	30	30
転ぶ立つ(陸上、氷上)	95	95	95
氷上での気をつけ	80	80	80
氷上歩行	80	80	80

3回目 両足滑走			
靴のはき方	40	40	40
転ぶ・立つ(陸上、氷上)	100	100	100
氷上での気をつけ	90	90	90
氷上歩行	100	100	100
両足滑走	50	50	50
4回目 両足滑走・瓢箪			
靴のはき方	50	50	50
転ぶ・立つ(陸上、氷上)	100	100	100
氷上での気をつけ	90	90	90
氷上歩行	100	100	100
両足滑走～屈伸滑走	70	70	60
瓢箪	30	30	30
5回目 瓢箪・両足ジャンプ			
靴のはき方	60	60	60
転ぶ・立つ(陸上、氷上)	100	100	100
氷上での気をつけ	90	90	90
氷上歩行	100	100	100
両足滑走～屈伸滑走	80	80	80
瓢箪	50	50	50
両足ジャンプ	80	80	80
6回目 バック滑走			
靴のはき方	60	60	60
転ぶ・立つ(陸上、氷上)	100	100	100
氷上での気をつけ	90	90	90
氷上歩行	100	100	100
両足滑走～屈伸滑走	95	95	95
瓢箪	65	65	65
バック滑走	40	50	50
スピードを出して滑走	10	10	10
7回～12回目 発表会の練習			
靴のはき方	—	80	100
転び方・立ち方	—	100	100
氷上での気をつけ	—	90	90
氷上歩行	—	100	100
両足滑走～屈伸滑走	—	95	100
瓢箪	—	70	80
バック滑走	—	50	60
ストップ	—	60	80
スピードを出して滑走	—	30	60

③回数別好感度 (％)

	6回	8回	12回
スケートが嫌い	11	7	0
上手に出来ないが楽しい	53	27	22
自由に楽しく滑る	36	66	78

④アンケートによる保護者の感想

(97年12回時のみ)

スケート教室に参加させて良かった	20名
少し心配はあったが良かった	6名
できれば参加させたくなかった	0名

対象32名中回答26名

感想

- ・4歳児の2月のスケート教室はかわいそうだと思っていました。でも、最後の時には(5歳児3月)、氷上ダンスを見て、転んでばかりいた子が、親を追い越したと我が子の成長を感じさせてもらうことが出来ました。
- ・初めはとても心配しましたが回を重ねるごとに楽しみにになりました。少しずつでも滑れるようになったことがとても嬉しいようです。
- ・大きなケガもなく、本人がとても楽しく参加してるようだ。色々話しをしてくれます。色々チャレンジしたほうがいいと思います。
- ・少しずつ、立てる様になり、歩ける様になり、まだすべる事は出来ませんが、前向きに頑張っているようです。やはり嬉しいですし、この世の中に、色々な事があり自分に出来るものがその中でみつけれられるのも素敵な事だと思います。(ダウン症児)
- ・スケートをテレビで見るだけの世界から、実際氷の上ですべる事ができ、大変だの、楽しいだの、が実感できたと思います。
- ・初めは少し不安(親の方が)もありましたが思っていたより本人は楽しい様子で、教室から帰ってくると「今日は何をやった」とか「まわれたんだよ」など聞くことができ、本人もいい経験ができ良かったと思っています。
- ・子供はスケート教室をとっても楽しみにしています。先生にほめて頂いたり、新しい事を覚えてくると嬉しそうに話してくれます。親の知らなかった部分を引き出して頂いたように思えます。
- ・電車に乗る機会も増え、家でマナーに付いて話す機会も増えましたし、氷の上で歩いた事を誇らし気に話す子供の顔を見て、やはり良い経験をさせていた

だいているな、と感じています。

- ・親の私は、スケートが得意ではないので、このような機会がなければ家族でスケートに行くことなどなかったと思います。私も小さい時に連れて行ってもらってればよかったと思います。月1回ですが1年たつとみんな上達してすばらしいです。

考 察

『靴をはく』の到達度は自分のサイズの靴を借りてきて、紐を緩め、ペロを引き上げ、脚を左右間違いない靴の中に入れ、紐を引き上げながら締めるところまでとし、安全の確認の為もあり、紐結びは大人がした。この事の理解が、6回では半数近くの子が出来ないでいたが、8回を過ぎると全員が理解し行うことが出来た。

『氷上での気をつけ』という静止は難しく、12回行っても2～3人は最後まで出来なかった。動きのある歩行や色々の滑走は、スピードの違いはあるが、どの子も出来るようになった。

『瓢箪』と称する滑走法は、足の幅を膨らまたりしながら前進後退することであるが、左右対称の動きは安定感があり多くの子供が回数を重ねることによりできるようになった。

スケートで滑るということは、片足に体重を乗せて移動していくことだが、幼児には難しく、一見スピードで滑っている様に見えるが、よく観ると早足でチョコチョコと走る滑走法になっている。これは、幼児の身体的特性として股関節の発達が未熟であり、体の中心が真ん中にあることから片方にバランスを掛け続ける事が難しい為と推察される。

指導回数の少ない時は寒いからとか、又は、始める前から苦手意識を持ち「嫌い」といって参加を渋ったりし、馴染めなかった子が最後までいた。12回の指導においては、尻込みしていた子供たちも、6回目頃から自分なりの上達に満足を感じるのか、参加を嫌がらなくなり、10回を過ぎると楽しみにするようになった。指導後の自由滑走では、一人でどンドン滑ったり友達と追いかけてっこをしたりしながら、スピードを楽しむ子どもたちがいたり、リンクを1～2周することがやっとな子供たちもいるが、共に氷上を滑走する楽しさを味わっているようである。

以上の事から、指導回数が多くなったことにより、習熟度も好感度も、目標に到達したことが考察され、今後とも月に1回、10回継続を目途として体験教室を行っていきたいと考えている。